

くさぶえの家

通信

平成16年3月31日発行 第11号

川崎市くさぶえの家

川崎市高津区末長1289
TEL 044-888-6692

発行人 林 敦 雄
編集人 漆 山 敬 夫

自閉症とことばの成り立ち

東海大学健康科学部教授 小林 隆児

これまで自閉症の基本障害として言語認知障害が強調されるとともに、その存在が脳障害と深く関連づけられて語られてきた。わが国の多くの自閉症研究従事者はこうした考えに同調してきた。しかし、残念なことに言語や認知という人間の高等な精神機能がどのようにして獲得されていくのか、その過程にまで踏み込んで論じる人は皆無であった。自閉症児の語ることばをひとつひとつ取り上げて、その特徴を探求することには熱心であっても、語られることばがどのような文脈で、どのようなコミュニケーション的意味合いをもったものであるのか、丁寧に検討していくという方法が取られることは少なかった。自閉症児とわれわれとのコミュニケーションを考えてみると、少なくとも当事者として自閉症児の他にわれわれ自身の存在も無視することはできない。しかし、なぜかことばの問題がすべて自閉症児個人の病理的現象として検討されてきた。

これまでの学問の多くは、近代科学のいうところの科学性を重視するあまり、「客観性」「論理性」「普遍性」を旗印にして、努めて対象を客観的なスタンスで捉えてきた。その姿勢がこれまでの自閉症の言語障害研究にも濃厚に反映している。しかし、このようなスタンスがいかに多くの問題を孕んでいるか今一度考え直してみる必要がある。

分かりやすい例を取り上げてみよう。ある対象、たとえば「机」がここにあったとしよう。それが「机」であることは自明のことであるとわれわれは思いがちである。ある対象は一義的に意味が決定づけられていると考えやすい。しかし、われわれがそれを「机」と意味づける（認識する）

際には、その対象のもつ多様な性質（たとえば、表面の性質、材質、大きさ、重さ、形態、用途などなど）の中からある性質（主に用途）に着目して、「机（書物を読んだり、字を書いたりする時にも用いる台）」と呼んでいるに過ぎない。ある時、疲れていた誰かがその「机」の上に座ったとしたら、それはその人にとってその時は「机」ではなく、「椅子」であるとしか言いようがない。たしかに、この対象はまさに「机」として作られているのであるから、それをわれわれも暗黙のうちに感じ取って「机」として捉えているということ是可以する。一見すると「机」としか言いようがないと思いがちなのは、われわれの認知の営みには（作者の意図を暗黙のうちに感じ取るといった）暗黙のうちに働いている心の働きが重要な役割を果たしているからである。

自閉症児に絵カードや実物を見せながら働きかける光景をよく見かけるが、そもそも対象のもつ意味を捉えるという営みはどのような過程を経て獲得されていくのか、そのことをもっと深く考えてみる必要がある。われわれは知らず知らずのうちに、対象の捉え方、着目の仕方などを暗黙のうちに獲得し、誰もがみんな同じように対象を捉えるようになっている。だから共通の意味を体得できるのであって、もし対象の捉え方、着目の仕方（知覚のあり方、意識の向け方などといってもよいかもしれない）そのものが異なっている場合には、そこに共通の意味を見出すことは困難になる。つまりはそこでは対象の持つ意味は必然的に異なってくるのである。

自閉症児とわれわれとで対象への関心の向け方がいかに異なっているか、そのことを筆者は大学

の臨床研究の場であるMother-Infant Unitで幾度となく痛感させられてきた。目の前にある「トランポリン」を見て、われわれは子どもをその上に乗せてやって遊ばせようとするが、その時子どもは「トランポリン」の縁のそばに座って目を凝らして眺めていた。その子は「トランポリン」のネットの網の目模様を心奪われていた。こんな時、われわれはその対象をまさに「トランポリン」と認知しているが、その時のその子どもはそうではない。明らかにその対象の異なった性質に着目していたのである。しかし、われわれはそのことに気づかず、当然それは「トランポリン」であるかのように子どもに働きかけている。ここで認められる対象の捉え方の相違は、その対象の意味を獲得していく過程と深く関係してくる。つまり、われわれは日常ほとんど意識することなく、対象の捉え方を一義的なものと考えながら、子どもに働きかけている。しかし、もしもこのように対象の捉え方（関心の向け方）に大きなずれが存在しているとしたら、その働きかけは慎重に

ならざるをえなくなるであろう。

最近、筆者は小書「自閉症とことばの成り立ち」（ミネルヴァ書房）を上梓したが、本書での中心的テーマは、先に述べた言語認知機能の獲得過程である。このテーマを徹底して考えてきた今痛感するのは、われわれが当たり前と考えてきたことを根底から疑うという姿勢を持つことの大切さとともに、われわれが何気なく働きかけていることの中に、これまでわれわれが気づかなかつたことがいかに多いかということである。つまり、われわれが通常は意識しないが、暗黙のうちに行っている行為そのものの中に、実は重大な意味が隠されているということである。そのような行為に相互に影響を受けながら、コミュニケーションは展開しているのであって、このような気づきにくいことを丁寧に取り上げていくことによって初めて、ことばがどのようにして獲得されていくかというコミュニケーションの問題の本質に触れることができるのではないかと思う。

健康万歳

栄養士 武藤 順子



（健康のために運動によって一日200～300キロカロリーを消費しましょう。）

40歳代になると年齢からくる体力の低下がでてきますが、その中には日常の運動不足が原因である場合も少なくありません。また、全身的な運動が不足してくると呼吸循環機能が低下してきて走ったり、階段を登ったりするとすぐ息切れや動悸がするようになります。さらに運動不足は体の代謝状態を肥満になりやすい代謝状態に変えてしまうために、たとえとるエネルギーを制限していたとしても、年齢とともに太ってくるという人も少なくありません。このような運動不足によるからだの変化を予防するためには、一日200～300キロカロリー程度のエネルギーを運動によって消費することが必要とされています。

運動による消費エネルギーはからだの大きさ、性別によって違います。一日300キロカロリーの場合ちなみに歩行では男性90分、女性120分です。日常生活も含めて自分自身にあった消費エネルギーの増やし方を考えてみましょう。

30歳代	筋力と全身持久力を総合的に発達させる運動を選びましょう。ジョギング、ランニング、サイクリング、水泳、テニスなど
40歳代	全身の持久力を高める運動をするようにしましょう。ジョギング、ランニング、サイクリングなど気軽にできる運動をひとつ選んで、少しずつ強さを増すようにしていきましょう。
50歳代	まず歩くことから始めて、ある程度効果がでてきたらジョギングや水泳など始めてみましょう。無理をせず長続きさせることが大切です。

●消費エネルギーの目安●

男性	ラジオ体操10分	30キロカロリー	女性	テレビ体操10分	40キロカロリー
	階段登り降り10分	60キロカロリー		通勤、買い物などの歩き30分	100キロカロリー
	キャッチボール40分	60キロカロリー		ラジオ体操10分	30キロカロリー
	急ぎ足で歩く20分	90キロカロリー		軽いダンスなど30分	120キロカロリー
	通勤などの普通の歩き30分	100キロカロリー			